

平成26年度研究成果報告書《平成25・26年度教育課程研究指定校事業》

都道府県・ 指定都市番号	33	都道府県・ 指定都市名	岡山県	研究課題番号・校種名	5 (4) 高等学校
				領域名	ESD
研究課題	新学習指導要領の実施を踏まえた、学校全体での教育課程の編成、指導方法等の工夫改善に関する実践研究 (4) ESDを学校全体で体系的に推進するために、各教科等の連携により、持続可能な社会づくりに関わる課題を見いだし、それらを解決するために必要な能力や態度を児童生徒に身に付けさせるための指導方法等に関する実践研究				
ふりがな 学校名 (児童生徒数)	おかやまけんりつはやしのこうとうがっこう 岡山県立林野高等学校 (341人)				
所在地 (電話番号)	岡山県美作市三倉田 58-1 (Tel 0868-72-0030)				
研究内容等掲載ウェブサイト URL	http://www.hayasino.okayama-c.ed.jp/ https://www.facebook.com/hayashino.okayama				
研究のキーワード	地域連携型 ESD 複線的評価方法の開発 カリキュラムへの位置付け				
研究成果のポイント	①校内における ESD の体系化と、評価方法を含むカリキュラム内部への位置付け ②「総合的な学習の時間」を活用した、共通の下地としての「課題発見・解決型学習」への取組 ③「地域連携型 ESD」の構築				

1 研究主題等

(1) 研究主題

地域社会の未来を予測し課題を解決する態度と能力の向上
 ～森と海をつなぐ吉井川流域をフィールドとして～

(2) 研究主題設定の理由

本校は、中山間地域に所在する普通科高校として、MDP (My Dream Project の略) と名付けられている「総合的な学習の時間」を活用し、「地域の課題を考える」をテーマに、学年を超えた縦割りグループによる課題解決学習を主体的・協同的に行っている。この活動を通し、多面的思考力、コミュニケーション能力の向上を目指してきた。

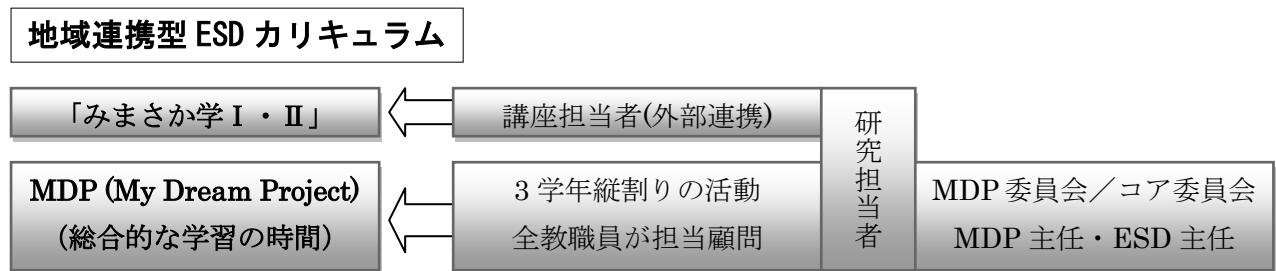
本研究は、平成25年度に引き続き、中国山地から瀬戸内海に至る吉井川流域をフィールドとして、地域の課題を考察する下地となる経験を積み上げることからスタートした。そして、そこから得られた課題及び考察について、最終的には個人レベルで言語化していくことによって、地域社会の未来を創造することができる人材の育成を目指して、この研究主題を設定した。

(3) 研究体制

本研究は「地域連携型 ESD カリキュラム」の中核である。MDP/ESD 主任及び本研究担当者からなるコア委員会から提出された企画は、MDP 委員会で審議された後、全教員が担当する MDP にて実施される。同時に、研究担当者は、2・3 年次生選択科目「みまさか学 I・II」が、MDP と

の差を残しながらも連携ができるように、NPO 団体等と協働しつつカリキュラムの設計に当たった。

なお、両者の差について概略を述べると、「Think globally」にウエイトを置くのが「みまさか学」、 「Act locally」に注目するのが MDP である。



(4) 2年間の主な取組

平成 25 年度	<ul style="list-style-type: none"> ESD について研修会を持ち、教職員及び生徒に対して意識付けを行った。 MDP 活動の中に ESD の視点を取り入れ、年間の活動計画を考え、実施した。 「山の Project」「川の Project」「地域の Project」「海の Project」の各活動を行った。 活動をポスター等にまとめる際、「持続発展可能な社会の実現」という項目を設けた。 研究の中間報告会を開催し、各方面から指導助言を頂いた。
平成 26 年度	<ul style="list-style-type: none"> MDP 活動評価ルーブリックの項目を、ESD の構成概念・能力・態度と完全一致させた。 生徒の成長について、質及び量の両面から評価できるように、評価シートを作成した。 引き続き、各 Project を実施して、多様性について視点を広げた。 選択科目「みまさか学 I」を開講し、ESD に対する理解と関心を深めた。 11 月に岡山市で開催されたユネスコスクール世界大会運営スタッフとして、生徒 42 名・教員 4 名が参加した。

2 研究内容及び具体的な研究活動

(1) 研究内容

① ESD の体系的推進

- MDP 活動の中に、ESD の視点を位置付けた。
- 教科の授業内で、ESD に関わる内容を意識的に取り扱った。
- 「ユネスコスクール世界大会」運営スタッフの一員として活動した。

② 課題発見・解決型学習の展開

- 「みまさか学 I」を開講し、MDP 以外の場面でも ESD への理解と関心を深めた。

③ 指導／評価方法

- 国立教育政策研究所が示した「ESD の構成概念・能力・態度」に準拠し、評価を試みた。

(2) 具体的な研究活動

① ESD の体系的推進

平成 26 年度は、「総合的な学習の時間(校内名称 MDP:My Dream Project)」の活動目標を立てる際に、国立教育政策研究所教育課程研究センター発行の「ESD の学習指導過程を構想し展開するために必要な枠組み」リーフレット(以下、『ESD の枠組み』という。)に記載されている「持

続可能な社会づくりの構成概念(例)」を、生徒がそれぞれの表現で言語化するところから始めた。

また、各教科の中でも ESD に関わる内容を意識的に取り扱ったほか、学習内容を俯瞰する「結果 ESD カレンダー」を作成し、教科内における ESD の位置付けを一覧表として示す予定である。

生徒が主体となった活動としては、11月5日～7日の間、岡山市で行われた「UNESCO ASPnet International ESD Events for Students and Teachers(ユネスコスクール世界大会高校生フォーラム)」に、生徒42名・教員4名が運営スタッフとして参加したことも挙げられる。平成24年度から3年間に及んだ準備期間を経て、学校の取組として ESD を位置付けた。

②課題発見・解決型学習の展開

MDP だけでなく、2年次選択科目の「みまさか学 I」においても、外部 NPO 団体と協働し、ほとんどの時間に外部から講師を招聘して、課題発見・解決型学習に取り組んだ。テーマは「再生可能エネルギーの未来」といった ESD に密着したものから、より実践的な「自立型問題解決法」ワークまで多岐に渡った。

③指導／評価方法

『ESD の枠組み』に示されている「6つの構成概念」について、年間3回の予定で言語化を行い、生徒それぞれによって異なる「何を学ぶか／学んだか」について、その変遷も踏まえながらまず個人レベルで質的に把握し、さらにそれを全体で共有していくことを試みた。また、「7つの能力・態度」については、MDP の「ステップごとの活動評価」評価項目と完全一致させ、生徒全員に対して、年間を通してどれだけの力が身に付いたか、客観的・量的に把握できるようにグラフ化して記録させた。これら二つの自己評価と、通常の活動で見取ることができる生徒の姿とを、各 MDP 担当者が総合して記述することによって、生徒の成長プロセスが浮かび上がるような評価を試みようとしている。

3 研究の成果と課題

(1) 成果

①ESD の体系的推進

昨年度まではやや曖昧であった「MDP と ESD」の関連性が明確になり、学校全体で ESD に取り組んでいることを意識化することができた。これは、MDP 実践報告会についての生徒アンケートの記述の中に、「持続可能性」という言葉が頻出することからも裏付けられる。また、「ESD は特別な活動ではなく、日常生活の延長線上にある」や「行動することが大切だ」、といった言葉の中にも、ESD がしっかりと位置付けられつつあることが感じられた。

②課題発見・解決型学習の展開

「みまさか学 I」を受講した生徒の中には、著しい成長を見せた生徒が多かった。例えば、少子高齢社会の労働力不足を解消する手段を発想するなど、外部から招聘した、実際に最前線で活動している「大人」のアイデアに刺激を受け、意欲が向上していく姿が見られた。

③指導／評価方法

生徒にとっては、MDP における場面ごとの活動と、身に付けるべき能力・態度とが対応していることによって、「この活動で、この能力・態度を身に付けることができた」と把握でき、「どのように学ぶか」という学びの方法も意識できるようになった。また、「何を学んだか」という点についても、他者(特に授業者)の言葉を借りて単純にそれを再生するだけでなく、自らの言葉でそれを捉え直すことで、より深まりのある学習が可能になった。評価する立場の教職員にとつ

でも、行動観察に併せて質・量の両方の評価素材が手元にあることで、より生徒の実態を踏まえた評価が可能となった。

(2) 課題

①ESD の体系的推進

各教科で取り扱う ESD 的な要素の、教科の枠を超えた共有が必要だと思われる。例えば、「現代文」で環境問題に関する評論文を扱っている時に、「政治・経済」ではその世界的な潮流について学び、「生物基礎」で生態系についての学習を深める、といった形である。ただし、既成のカリキュラムに大幅に手を入れることは現実的ではないし、また、教科担当者の抵抗感・負担感も大きくなるのが危惧されるので、あくまでも「可能な時に連携」というスタンスが望ましいと思われる。

②課題発見・解決型学習の展開

本研究では「みまさか学Ⅰ」を例として取り上げたが、もちろん他教科でも、こうした課題発見・解決型学習の展開は必要である。

平成 26 年 12 月 22 日付けの中教審答申「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育，大学教育，大学入学者選抜の一体的改革について」の「高等学校教育，大学教育，大学入学者選抜における課題」には、次のように示されている。

しかしながら、我が国が成熟社会を迎え、知識量のみを問う「従来型の学力」や、主体的な思考力を伴わない協調性はますます通用性に乏しくなる中、現状の高等学校教育，大学教育，大学入学者選抜は、知識の暗記・再生に偏りがちで、思考力・判断力・表現力や、主体性を持って多様な人々と協働する態度など、真の「学力」が十分に育成・評価されていない。

課題発見・解決型学習は、ここに指摘されている「思考力・判断力・表現力」「協働する態度」を育む手だてとして有効であり、従来型の学力観からの早急な意識改革が必要である。

③指導／評価方法

その時間内に、活動の目的と身に付けるべき能力について意識付けし、さらに授業終了前に、確実に時間を区切って自己評価をさせる場面が必要である。特に今年度は、活動が佳境に入った時期に、こうした時間が確保できないことが問題点として挙げられていたので、担当者の「授業デザイン能力」が今以上に求められるようになるだろう。

(3) 指定期間終了後の取組

①MDP と ESD とを連動させ、「地域連携型 ESD」をブラッシュアップしつつ、継続的に展開する。

NPO 等の外部団体の協力を積極的に仰ぎながら、MDP 以外の各教科でも、ESD の意識付けをより明確にすることで、持続発展可能な社会の積極的形成者を育てる必要がある。

②MDP・ESD で身に付けることができた「能力・態度」を、教科にフィードバックする。

各教科のカリキュラムの中で、「何ができるようになるのか」を明確化していく上で、MDP・ESD で身に付けた能力・態度を取り入れ、定着できるように位置付けていく。

③生徒の実態に即した評価の、精度を向上させるために、質的・量的評価の研究を重ねる。

2 種類の評価シートについて、実践しつつも改善点を見いだしていく。

④いわゆる「教科学力」だけでなく、多様な能力を測ることができる評価方法を研究する。

教科横断的・汎用的に使用できる「多様な能力」の評価指標と、実施可能な方法を見いだす。